◇◇◇

「海の生き物を守る会」メールマガジン No. 205　　2017. 9. 16（土）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage： http://e-amco.com/

◇◇◇

「今月の海の生きもの」　**アリアケモドキ**　*Deiratonotus cristatus*

北海道から沖縄までの日本全土の河川汽水域に分布するスナガニ上科ムツハアリアケガニ科のカニ。平坦な甲面とその中央部を横走する隆起線が特徴的。生息場所は干潟から潮下帯まで幅広く、摂餌などの活動は夜間の冠水時に行われる。そのため、他のスナガニ上科の種で知られる waving（はさみ振り行動）はみられない。

日本の集団は遺伝的に大きく 3 つの地域グループに分かれており、それは本州太平洋沿岸、北海道・北九州・瀬戸内海沿岸、そして奄美大島沿岸である。しかもこのグループ間で生活史にも違いがみられ、本州太平洋岸のものは夏季に繁殖期があるのに対し、奄美大島や瀬戸内海のものは冬季に繁殖期がある。本種が記録される徳島県北岸と和歌山県南岸はわずか 100 km 程度しか離れていないが、徳島では冬繁殖、和歌山では夏繁殖となっている。

（北海道網走市卯原内川にて　和田恵次氏撮影）

目次

「今月の海の生きもの」アリアケモドキ・・・・・・・・・・・・1
1.「海の生き物を守る会」の活動について・・・・・・・・・・・・・2
2.「クジラ切手コレクション」（21・22）立川賢一・・・・・・・・・・5
3.海の生き物とその生息環境に関するニュース・・・・・・・・・・7
4.海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報・・・・・・・・10
5.海の生き物とその環境に関する出版物・・・・・・・・・・・・・12
6.「きらめく動物たちの命と海　久保田信の白浜だより」（126）・・13
7.「有明海と三陸の水辺から」（60）田中　克・・・・・・・・・・・14
8.事務局便り　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
9.編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

1.「海の生き物を守る会」の活動について

【活動予定】

●シンポジウム「ヒト，カブトガニ，干潟　―海はだれのもの？」を後援

日本には生きた化石カブトガニの生息する素晴らしい干潟がまだ残っています。カブトガニの生息する干潟とはどんな役割があるのか？ 日本や世界の干潟はどのような現状なのか？

カブトガニは今、人間の保護を必要としています。次世代にこの宝を残すために、まずは彼らの置かれている現状、問題点、保全策について考えてみましょう。※本シンポジウムは福武財団の援助を受けました

日時：2017 年 9 月 24 日（日）12:50～17:00
場所：北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）1 階ガイド館
主催：広島大学大学院生物圏科学研究科／共催：北九州市立自然史・歴史博物館、広島大学総合博物館／後援：日本分類学会連合、海の生き物を守る会、日本カブトガニを守る会福岡支部

プログラム

12:50～13:00　開会の言葉　上田恭一郎（北九州市立自然史・歴史博物館）
第 1 部【日本の干潟、世界の干潟】司会：大塚 攻（広島大学）
13:00～13:40　向井 宏（元北海道大学）「日本と世界の干潟の保全」
13:40～14:20　坂口 隆（環境省）「（タイトル未定）」
14:20～14:30　休憩
第 2 部【福岡、山口、広島のカブトガニの生息状況】司会：武石全慈（北九州市立自然史・歴史博物館）
14:30～14:50　和田年史（兵庫県立大学）・秀野真理（福岡エコ動物海洋専門学校）「カブトガニ津屋崎個体群の絶滅危機の現状とそれまでの過程」
14:50～15:10　林 修（日本カブトガニを守る会）「曽根干潟のカブトガニの現状」
15:10～15:30　原田直宏（日本カブトガニを守る会）「山口のカブトガニ」
15:30～15:35　休憩
15:35～15:55　小池裕子（九州大学）・西田伸（宮崎大学）「カブトガニの生存の危機となるものは？」
15:55～16:15　大塚 攻（広島大学）「カブトガニ保全の問題点を探る」
16:15～16:35　清野聡子（九州大学）「日本のカブトガニの生息地の参加型保全・再生と環境政策の展開」
16:35～17:00　**総合討論**　司会：清水則雄（広島大学）、全講演者

シンポジウムの問い合わせ：広島大学　大塚 攻 e-mail：ohtsuka@hiroshima-u.ac.jp　tel 0846-22-2362
会場の問い合わせ：北九州市立自然史・歴史博物館　武石全慈 e-mail：takeishi@kmnh.jp　tel 093-681-1011

●砂浜フィールド図鑑（2）「北海道の海浜植物」を近日発行

海の生き物を守る会では、先の砂浜フィールド図鑑（1）「日本のハマトビムシ類」に続いて、自然保護助成基金のプロ・ナテューラファンドの助成によって、「北海道の海浜植物」を今月末に発刊します。掲載種数は 54 種で、主要な種はほぼ網羅しています。海の生き物を守る会の会員で、図鑑をご希望の方には、1 部無料でお送りしますので、hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp 向井までお知らせください（申し訳ありませんが、送料をご負担ください）。また、会員外でも希望者には、頒布する予定です。詳細は「うみひるも」次号でお知らせします。

＊＊

◆さしあげます！

下記書籍・CD・DVD を希望者に差し上げます（送料はご負担ください）。

◎第 7 回自然環境保全基礎調査「浅海域生態系調査（干潟調査）報告書」2007 年環境省自然環境局 生物多様性センター　p.235　出現種リスト付き　CD 版　残り 10 部

◎Diving team Snack Snufkin　「Exploring the Nature of Oura Bay and its surrounding area」
2010 年　日英両語による大浦湾の生物のパンフレット

◎International Symposium on Integrated Coastal Management for Marine Biodiversity in Asia. 2010/1/14-15 Kyoto　DVD 版　残部あり

◎GREEN AGE　2015-4 特集・これからの海岸林造林を考える　2015 年　日本緑化センター　1 部

◎杉山恵一監修／自然環境復元研究会編「海辺ビオトープ入門：基礎編」146pp　信山社サイテック刊　2000
（やや汚れあり）　1 部

◎西平守孝「フィールド図鑑　造礁サンゴ」241pp　東海大学出版会刊　1988　1 部

◎向井 宏 論文 別刷り　余部あり　「陸域―沿岸域統合系における藻場生態系」　月刊「海洋」2005、「海域・海洋保護区の効果と現状」　環境情報科学　2009、「ジュゴンの摂餌生態：現状と展望」　海洋理工学会誌　2009、「干潟・藻場の再生事業：その問題点」　地球環境　2011

◎向井 宏　「第一編　厚岸地方の自然環境　第二章　厚岸町の特色ある生態系」
新厚岸町史（通史編・第一巻）　2012 年　残り 1 部
向井 宏　「同　第四章　厚岸町の植物」　同　2012 年　残り 1 部

◆CD／DVD お貸しします！

下記を視聴したい方にお貸しします（送料はご負担ください）。コピーも可。

◎2017 年 6 月 10 日開催シンポジウム「奄美の森と海のつながり」DVD3 枚

★以上、希望者は、向井　宏 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp までお知らせください。

お知らせコーナー

●辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会の活動について

海の生き物を守る会が参加している「辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会」では、生物多様性を誇る辺野古・大浦湾の埋立を止めるように願っています。しかし安倍政権は、西日本の 14 カ所の山を削り、辺野古の海の埋立を強行しようとしています。この埋立用に故郷の土砂を送らないよう要請する署名活動を行い、これまで 10 万筆を超える署名が集められました。しかしながら、沖縄の民意を無視して辺野古の埋め立て工事が強行されています。辺野古現地での反対運動とともに、私たちの本土から埋め立て用の土砂を送らせない運動も、今後重要になってきます。土砂搬出反対の署名も新しい用紙でさらに多くの署名を集めています。辺野古の美ら海とそこに棲むサンゴやジュゴンなどの海の生きものをぜひとも守りましょう。

活動を広めるためにパンフレットを発行しています（写真は表紙）。1 部 500 円をカンパとしていただいています。故郷の山を守り、辺野古の海を守る手立ての一つとして、この活動に賛同する意味からも、ぜひご購入をお願いします。す。

●好評販売中！　砂浜フィールド図鑑（１）『日本のハマトビムシ類』

海の生き物を守る会では、砂浜海岸生物調査を一般の人々に呼びかけています。このたび、「砂浜フィールド図鑑」シリーズの（１）として、どの浜辺にも必ず見かけるハマトビムシ類の図鑑を刊行しました。

A5 判 14 ページ。1 冊 100 円で頒布しています。会員には、1 冊に限り無料でお送りします（送料のみご負担ください）。

★ご希望の方は送り先と部数を下記アドレス（向井 宏）hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp までお知らせください

冊子代金＋送料のお振り込み先：**ゆうちょ銀行**

九二八店　普通 0284839（記号番号 **19230-2848391**）**ムカイヒロシ**

2. クジラ切手コレクション（21)(22）　立川賢一

脊椎動物門哺乳綱鯨偶蹄目ヒゲクジラ亜目ナガスクジラ科

ザトウクジラ(座頭鯨)

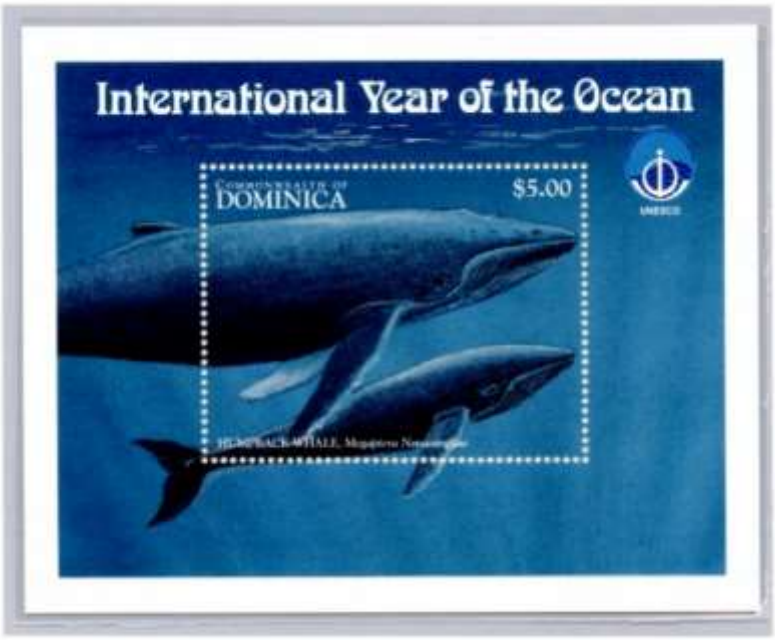
Humpback Whale　(*Megaptera novaeangliae*)

ザトウクジラは、活発な運動をする巨大生物です。地球上の全海域に広く分布しています。冬季には低緯度の暖かい海域で繁殖し、夏季には高緯度に移動して、寒冷な場所で採食に専念します。

ザトウクジラ(座頭鯨)

Humpback Whale (*Megaptera novaeangliae*)

ザトウクジラは、4～7歳で性成熟すると言われています。この時の体長は、雌では12m程度です。15歳まで成長は続き、平均で13.7mになるそうです。妊娠期間は1年ほどですが、出産間隔は1～3年のようです。



3. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

編注： このニュース欄の情報源はマスコミ・団体の会報・その他多岐にわたります。海の生き物に関する最新情報を共有するため、事実と思われる内容を紹介し、それについて必要と思われる範囲で論評もしています。文責者名を記事毎に明記しますが、独自の裏付け調査をしているわけではありません。その点は、ご承知おきください。

読者からの投稿も大歓迎です。

【東海】

●防潮堤建設現場で大量の違法廃棄物　浜松市

静岡県浜松市内の遠州灘沿岸では、静岡県と浜松市による全長 17.5km の防潮堤建設が進められている。その舞阪工区で、地中に大量の廃棄物が発見された。中身は家庭ゴミのほか、ビニール類やプラスチック、コンクリート片など。数千㎥に及ぶ廃棄物は、内容から 1965 年以降に埋められたと推定されている。1965 年にこの場所は、海岸法によって「海岸保全区域」に指定されており、この場所で廃棄物を埋設することは、知事の許可がなければ認められていない。1965 年以降にこの場所に廃棄物を埋めることを許可した書類は残っておらず、違法な廃棄物とみられる。静岡県では、発見された違法廃棄物の処理方法を検討、防潮堤の完成予定が遅れないようにしたいと述べた。処理費用は最大十数億円かかる。

巨大防潮堤を建設している東北三陸地方では、ほぼできあがった防潮堤を前に住民に戸惑いや反発がでているという（朝日デジタル 2017.9.11）。浜松市の防潮堤では、日本三大砂丘の一つ中田島砂丘の真ん中を掘り貫いて砂丘とほぼ同じ高さの防潮堤を作っている。自然の防潮機能を壊し、景観を台無しにして、コンクリートの防潮堤を作る行政の姿勢には、大きな疑問を感じる。（文責：向井　宏）

【近畿】

●近年にないサンゴの白化　和歌山県白浜

今年の高水温によるサンゴの白化が各地で報告されている。和歌山県白浜町にある京都大学瀬戸臨海実験所の北浜でも、過去最大規模のサンゴの白化が起こっていることが、本会会員で同実験所の久保田信准教授の調査によって明らかにされた。久保田准教授は「ここでは 20 年以上も毎日定点観察を続けているが、これほど酷いのは初めてだ。半分以上白化した種類もある」と述べている。（文責：向井　宏）

●アカウミガメの産卵　昨年並み　みなべ市千里の浜

和歌山県みなべ町山内の千里の浜では、今年アカウミガメの上陸数が 271 回、産卵は 127 回見られた。上陸数は昨年を上回ったが、産卵回数は昨年並みとなった。8 月の台風 5 号の影響が及び、産卵した卵の一部が流された。みなべ町教育委員会によると、この 10 年間でもっとも上陸が多かったのは 2012 年で 293 回、逆に最も少なかったのは 2015 年の 82 回だった。今年は多い方だが、台風でかなりの卵が死んだと考えられており、孵化数はまだ確認できていないが、孵化して海に帰ったのは少ないとみている。（文責：向井　宏）

●太地町でクジラの追い込み網が始まる

残酷な殺戮場面が知られて反対運動に直面している和歌山県太地町の小型鯨類の追い込み網漁が、今年も9月1日に解禁された。漁を行っている太地町いさな組合は、解禁の1日は波が高くて漁ができず引き返していたが、3日に、コビレゴンドウを約30頭、島尻湾に追い込んだ。湾に閉じ込めた後、翌日から食肉用として殺し、水揚げした。追い込み網漁は、イルカ類が来年2月末まで、ゴンドウ類は4月末までが漁期となっている。今年はこの漁に反対する団体の積極的な行動はみられなかった。（文責：向井　宏）

【九州】

●熊本県立大学生がシジミの保護活動

ヤマトシジミが大量に生息し、1970年代には年間20～80トンも水揚げされ、好漁場だった熊本県玉名市の菊池川河口では、現在ではヤマトシジミの生息数も減少し、シジミ漁はほとんどなくなってしまった。ここにヤマトシジミを復活させようと、熊本県立大学の学生等30人が、堤裕昭教授の指導の下、河口付近のヤマトシジミ約30kgを採取し、2km上流部へ放流した。ヤマトシジミの減少は、漁が最大であった同じ時期に、高度経済成長期の建設ラッシュに使うために川砂を大量に採取し、川底が低下してヤマトシジミの生息場所が減少したことによると考えられている。川底の砂が残っている2km上流への移植でヤマトシジミを復活させようという試みだが、堤教授は「かつての量に戻すには、長い時間がかかる。今後月1回の調査を継続していきたい」と語った。河川の環境が元通りになることが、その前提でなければならない。川砂の採取はかなり以前に禁止されたが、いまでもダム・砂防ダムや河川改修によるコンクリート化で、川砂の復活は十分でない。シジミだけでなく、河川環境の復活をどうすれば良いか、大学生には考えてもらいたい。（文責：向井　宏）

●八代海で赤潮被害　養殖ブリ2000～3000匹が死亡

熊本県によると、八代海に出現した赤潮プランクトン「シャトネラ」による赤潮で、天草市御所の浦沖の養殖場で、ブリ2000～3000匹が死亡した。県は9月3日に赤潮対策本部を設置し、被害情報を集め、養殖業者らに餌止めや早期の出荷を呼びかけている。赤潮警報が出される基準（10細胞／1ml）を大幅に上回る82細胞を確認した。八代海では、8月16日に全域に赤潮警報が発令されていた。有明海全域にも8月25日から警報が出されており、雨が少なく海水温が高いので、赤潮が発生しやすい条件が整っている。（文責：向井　宏）

●嘉徳海岸の自然を守るため　署名活動始まる

鹿児島県奄美大島瀬戸内町の嘉徳海岸は、集落の前に護岸などの人工物のない自然海岸で、奄美諸島や琉球列島野中でも最後に残る自然海岸の砂浜である。この海岸に流れ込む嘉徳川の河口には、清流が流れ、深い緑の谷、広い砂浜が印象的だ。「うみひるも」でもすでにお知らせしたように、今この嘉徳海岸に護岸計画が持ち上がっている。高さ6.5mのコンクリートの護岸が砂浜全体530mにわたって作られ浜全体を覆う計画である。2014年に奄美大島に接近した2つの台風の影響で、砂浜が大幅に削られ砂丘の上のアダンの林も波にさらわれ、さらに集落が一部崩落の危険にあると思われたため、一部の住民が護岸建設を希望したためだ。それに対応した鹿児島県大島支庁瀬戸内事務所では、上に述べたような環境も景観も無視した巨大護

岸を全体に張り巡らす計画を作った。これは、どこにでも見られる海岸の護岸計画である。しかし、この嘉徳海岸は、かつてオサガメが上陸・産卵したことのある日本でも唯一の浜であり、そのために「ジュラシック・ビーチ」とも呼ばれるようになった。その他にも、今年海の生き物を守る会が行った砂浜の自然観察会では、絶滅危惧種となっているタイワンキサゴ、イシマキガイ、フネアマガイ、ヒメツメタガイ、キュウシュウナミノコ、ナガタママキ、トウカイタマキビ、フジイロハマグリなど貴重な貝類やオカヤドカリ類が多く見られ、嘉徳川には絶滅したと思われたリュウキュウアユが生息しているなど、この海岸の生物多様性と希少性が検証された。

この海岸を護岸工事から守るために、海の生き物を守る会は、自然と文化を守る奄美会議とともに、現地視察を行い、現在ではかなり元の状態に砂の堆積が進み、回復していることを確認した。その上で、県の瀬戸内事務所と環境をどう守るかについて議論し、鹿児島県知事宛に要請書を提出した。その結果、県は当初の護岸計画をいったん白紙に戻し、あらためて有識者の検討会を組織し、議論し直すこととなった。8 月に第 1 回の検討会議が開かれ、議論が始まった。嘉徳の区長や委員の一部からは護岸の必要性が主張されたが、一方、他の委員からは、慎重に検討するべきとする意見も出ている。県としては、今年あと 2 回予定されている検討会で結果を出す予定である。

一方、嘉徳に自然を求めて子ども連れで引っ越してきた住民は、この護岸工事が子どもたちに与える悪影響を心配している。すでに嘉徳を去った家族もある。この奇跡的な自然が残る場所に人々が気づかない限り、巨額の無駄な予算を使った護岸工事が進んでしまう可能性が高いことから、護岸工事の中止を求める人たちによって、「奄美の森と川と海岸を守る会」が作られ、署名活動が始まった。（文責：向井　宏）

★呼びかけは、「私達は琉球諸島の中でも、唯一残された美しい自然海岸を破壊する護岸建設に強く反対し、防風・防潮・砂防林として重要なアダンの砂丘を復旧させることを望みます！」
★署名は、「change.org」の右記サイトから。https://goo.gl/nxihEo（短縮リンク）

「うみひるも」に掲載する海の生き物の写真
や情報をお持ちの方、是非ご提供ください。
メール hirumo@live.jp　／投稿フォーム https://goo.gl/GjWIjL

4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

◆日本甲殻類学会・日本貝類学会合同シンポジウム

日本甲殻類学会と日本貝類学会は、それぞれ甲殻類および軟体動物の生物学を扱う学会として、ともに長い歴史があります。日本とその周辺域は、甲殻類および軟体動物の種多様性は非常に高く、海洋、陸水、陸上の生態系における重要な位置を占めており、古くからさかんに研究が行われています。またそうした生態系における甲殻類と軟体動物の関係は多種多様で、共生関係、寄生、捕食・被食関係、競争関係など、さまざまです。近年のこうした分類群間の研究によって、非常に興味深い、場合によってはわれわれの想像を超えた面白い現象が発見されています。

こうしたことに鑑み、日本甲殻類学会と日本貝類学会は合同でシンポジウムを開催することとなりました。第 1 回は、2017 年 4 月 15 日に和歌山県の白浜町で開催され、海外からの 3 名の招待講演者を含む国際シンポジウムとして、日本貝類学会の大会内で行われました。シンポジウムのメインテーマは「共生、寄生関係に関する進化生物学」で、150 名あまりの参加者がありました。

今回、東京大学大気海洋研究所で、日本甲殻類学会大会の開催前日に、第 2 回の合同シンポジウムが開催されることとなりました。今回のメインテーマは「**捕食・被食と殻の役割**」で、貝類・甲殻類間の捕食と被食、あるいはそれに関わる形態進化、または殻を利用した被食回避を主たる内容にしたもので、新進気鋭の研究者による最前線の研究内容が発表されます。

参加は両学会の会員・非会員にかかわらず無料、事前の申し込みも不要です。多くの皆さんのご参加を期待いたします。http://csj-symposia-2017.webnode.com/accommodation/

日時：2017 年 10 月 6 日（金）13:00～17:45

場所：東京大学 柏キャンパス 大気海洋研究所 講堂

コンビナー：狩野泰則（東京大学 大気海洋研究所）

実行委員：狩野泰則・猿渡敏郎・大土直哉・中野智之・福森啓晶・高野剛史・矢萩拓也

プログラム

- ✧ 入江貴博（東京大学 大気海洋研究所）「誘導防御：いまさら訊けない蟹と貝のカンケイ」
- ✧ 藤原慎一（名古屋大学博物館）「カニのハサミのかたちと使い方の関係～形態から見積もるハサミの破壊力と壊されにくさ」
- ✧ 加賀谷勝史（京都大学 白眉センター）「シャコの殻割り行動の制御機構」
- ✧ 石川牧子（ヤマザキ学園大学 動物看護学部）「太古の攻防を垣間見る：生痕から見る貝・ヤドカリへの捕食圧」
- ✧ 早川 淳・大土直哉（東京大学 大気海洋研究所）「大型甲殻類および肉食性巻貝類によるサザエの捕食とその痕跡」
- ✧ 中山 凌・中野智之（京都大学 瀬戸臨海実験所）「捕食回避から見るカサガイの巻貝への付着行動」
- ✧ 許 晃（東京大学 生物科学専攻）「イソダニ類の摂餌生態と貝形虫の捕食痕」
- ✧ 角井敬知（北海道大学 理学部）「巻貝の殻を背負って生きるタナイス」
- ✧ 遊佐陽一（奈良女子大学 理学部）「寄生性フジツボ・トサカエボシのアグレッシブな摂食」
- ✧ AKI INOMATA（現代美術家）「ヤドカリの宿貝替え行動を用いたアート作品の制作」

◆海藻おしば協会　2017 年度　第２回勉強会（レクチュア編）

日時：2017 年 11 月 12 日（日）10:00～16:00 頃まで予定　受付 9:30～

場所：東京海洋大学品川キャンパス 2 号館 1 階 100B 教室

特別講師：小松　輝久先生（元東京大学大気海洋研究所准教授）

講義内容「**沿岸域における藻場の生態学的な役割**」（午前中：約 90 分）

参加費：協会会員 3500 円（現地までの交通費・お弁当代などは別途）、未会員で参加希望の方は 3500 円＋当日に協会登録費用が必要です（入会金 1000 円・年会費 2000 円＋海の森基金（任意 1 口 1000 円）

◆命輝くサンゴ礁の海　大浦湾を守ろう！辺野古の工事、いまどうなってるの？

【市民集会】

日時：2017 年 9 月 27 日（水）18:30～20:40

場所：北とぴあ　つつじホール（東京都北区王子 1-11-1）

ゲスト：山城博治さん（沖縄平和運動センター）、北上田毅さん（沖縄平和市民連絡会）

参加費：500 円

【院内集会と防衛省交渉】

日時：2017 年 9 月 28 日（木）13:00～16:40

場所：参議院議員会館講堂

資料代：500 円

主催：辺野古・高江を守ろう！NGO ネットワーク、FoE Japan、美ら海にもやんばるにも基地はいらない市民の会、辺野古への基地建設を許さない実行委員会

5. 海の生き物とその環境に関する出版物

●ACADEMIA162 号　全国日本学士会　2017

京都に本部を置く一般社団法人全国日本学士会は、さまざまな社会的に重要な課題に関する特集を組み、隔月に発行する会誌「**ACADEMIA**」に掲載し、会員とともに関係者に配布しています。7 月 31 日に発行された第 162 号には、宝の海から瀕死の海に至り、解決の道が見えないままにいっそう混迷を深める、わが国の沿岸環境と沿岸漁業再生の“試金石”、**有明海の再生に関する特集**が掲載されています。

執筆者とテーマは以下のとおりです。

- **田中 克（京都大学名誉教授・舞根森里海研究所長）「有明海の再生と国の未来：森里海連環から見据える」**
- **佐藤正典（鹿児島大学学術研究院理工学域理学系教授）「有明海・諫早湾の環境復元の意義―泥干潟の豊かさを未来に残すために」**
- **中尾勘悟（肥前環境民族写真研究所代表・写真家）「諫早湾と有明海を撮り続けて 40 年」**
- **宮入興一（長崎大学名誉教授・愛知大学名誉教授）「諫早湾干拓事業の公共事業としての破綻と環境再生」**
- **堀 良一（よみがえれ！有明訴訟弁護団弁護士）「問われる司法と有明海再生」**

有明海は氷河期の遺産的な大陸沿岸遺存種（特産種）を多く保持する生物多様性からも大変重要な海ですが、今その保全が大いに危ぶまれるまでに環境は劣化し、深刻な事態に至っています。また、諫早湾潮受け堤防の開門を巡り、地域社会が崩壊の危機に至っています。このような「有明海問題」の全体像を各方面の皆さんの執筆により明らかにしたものです。ぜひ、多くの皆さんに目を通していただきたいと思い、紹介させていただきました。★ご希望の方は、（一社）全国日本学士会（〒606-8236 京都市左京区田中大久保町 7）にお問い合わせください（HP http://academic-soc.jp/ ）。在庫があれば無料で提供いただけると思います。

（海の生き物を守る会会員 田中　克）

6．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより（その126）】

小さなゴンズイ玉

わが国では中部以南の暖かい海で見られるゴンズイは、東南アジアや紅海・南アフリカ沿岸にも分布している。黄色い縦縞と 4 対のヒゲが特徴のナマズに似た姿だが、夜になると縦縞の代わりに背部に横縞が 7、8 本でき、見た目がかなり変化する。ゴンズイの背鰭と胸鰭の一番前が太い毒棘で、これにやられると死亡に至る場合もあるので要注意である。

2017 年の夏も、この時期恒例のゴンズイ玉が白浜町瀬戸漁港に現われた。ゴンズイ玉は兄弟姉妹の集合体で、少なくとも数十個体が見事な一丸となっており、しかも皆が同年齢なのである。玉の効果はてきめんで、袖触れ合う様に緊密に寄り合うことで姿を大きく見せて外敵から身を守れている。興味深いのは、ゴンズイ玉の大きさがいろいろであっても粒ぞろいであることで、構成員が同じように足並みそろえて成長できるよう、きっとうまく調節されているのだろう。

しかし、2017 年 7 月 13 日に遭遇したゴンズイ玉は異様に小さかった。この時期には毎日の様に複数のゴンズイ玉が見られるが、この玉はたったわずか 11 個体のみの構成だった。それでも、けなげにみないっしょに歩調を合わせ、漁港の岸壁に沿って、行ったり来たりしている。その玉の全体形は刻一刻と変わってゆくが、どうやら縦一列には並ばない。幅と長さの調節は難しいであろうが、こんな小さな塊になってしまっては、彼らの 1 個体でも成魚になれるであろうか？　そして、立派に親として単独生活ができるようになれるのであろうか？

白浜町の瀬戸漁港に 2017 年 7 月 14 日に現れた 11 個体のみからなるゴンズイ玉（体長数センチメートルほどの幼魚の群れ）

7. 有明海と三陸の水辺から(60)　　田中　克

加賀海岸の神島に生息するアカテガニ

本連載の 39 回目（うみひるも 184 号）に「加賀海岸の緑化と生物多様性保全」を紹介し、その中でアカテガニの生息についても触れました。神島は、大聖寺川河口と北潟湖の間に位置し、古くより鹿島神社が祀られ、鎮守の森としてタブやスダジイなどの常緑照葉樹が水際から生い茂り、森の中は昼でも暗い環境で湿度が保たれ、森が海に直接つながる自然が維持されてきました（写真１）。海で育った幼生が変態して稚ガニになると上陸する上で、また、成熟した親が海辺に下りてきて幼生を放出する上でも好適な条件を備えています。広葉樹の森の腐葉土層はアカテガニが巣穴を作るうえで都合よく、落ち葉は餌となり、脱皮に必要な湿地（水たまり）も存在し、多くのアカテガニ（写真２，３）が生息しています。

写真1　アカテガニが今でも多く生息する照葉樹が茂る神島（吉崎御坊の高台から臨む）

写真１は神島を、その南側に位置する吉崎御坊から写したものですが、吉崎は、わが国における仏教界でもっとも信者の多い浄土真宗の確かな歴史が刻まれた重要な土地です。親鸞上人の弟子であった蓮如上人が、京都における応仁の乱から逃れ新天地を求めて辿りついたのがこの吉崎なのです。この地での蓮如上人の滞在は 4 年半ほどと短いものでしたが、その教えは瞬く間に広まったといわれています。吉崎御坊を設置した高台から蓮如上人が北潟湖や神島、さらにその向こうの日本海を眺める絵図の説明には、多くのアカテガニが周りを歩き回っていたことが記されています。

写真2　神島の落ち葉だまりに見られたアカテガニ

写真３　アカテガニが脱皮するのに必要とされる神島の小さな池で見られたアカテガニ

時代は進み、この加賀海岸が再び大きく注目されるようになったのは、各地の産物を積んで日本海を北上し、北海道で売り捌き、帰路にはコンブやニシンなどの北の産物を積んで関西に運び、莫大な利益を上げた北前船の船主が豪邸を構えたことです。北前船歴史資料館に残された当時の繁栄を描いた絵巻のなかには、浜辺にアカテガニが描かれています（写真４）。これらのことは、アカテガニは古くから神島をはじめ、周辺にはどこの森にも生息していたことを想定させます。その後の開発、とりわけ、海と陸の間に道路ができ、岸辺は垂直の護岸で縁取られるなど、森と海のつながりが断絶され、アカテガニの海と陸と往復する生活史が成り立たなくなったことを示しています。鎮守の森としての神島は、まさにアカテガニのサンクチュアリとして、長くその生息を保障してきたといえます。

写真４　江戸時代後期の北前船の船主の家に保存された絵図に描かれたアカテガニ

今、この神島のアカテガニにも、ハクビシンなどの外来生物による捕食など、生息が危ぶまれる問題が顕在化しつつあります。しかし、本当の危機は、神島だけに生息地が限定されてしまったことなのです。海に放出されたアカテガニの幼生は、ひと月あまりの浮遊期を経て稚ガニに変態すると回帰します。しかし、その回帰は確率的であり、神島の周辺域にも広く生息することによって、これまで神島のアカテガニの生息も保障されて来たと思われます。神島のアカテガニの存続を確かなものにするためには、周辺の森と海のつながりを修復するなど広域的な保全の取り組みが不可欠と思われます。

8. 事務局便り

- 「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は、事務局までご連絡ください。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし、写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。
- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ご一緒に講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会に寄付をお寄せください。口座は会費と同じです。送金内容について事務局までご一報ください
- うみひるもの表紙を飾る海の生き物の写真を募集しています。種名同定済みですと、大変助かります。海にお出かけの際にはカメラご持参で。ベストショットが撮れたら、ぜひ編集部までお送りください。

8. 編集後記

今号のニュース（p8）にもある通り、和歌山県太地町（たいじちょう）で小型鯨類の追い込み網漁が始まりました。シーシェパードなど反対派の妨害が少なかったのは、日本政府が彼らを入国禁止にしたからだそうです。ちょうど漁の解禁日に、東京で『おクジラさま ふたつの正義の物語』というドキュメンタリー映画の上映イベントがあり、映画好きの私も行ってきました。『ザ・コーブ』がアカデミー賞をとった後、それに対抗するように 2 人の日本人女性がそれぞれ映画を撮りました。どちらの上映イベントにも行きましたが、数カ月前に行った八木景子監督作品（ビハインド・ザ・コーブ）の上映イベントは、監督の意思ではないにしても「外国にとやかく言われたくない」という一方的なムードでした。それに対して、今回行った『おクジラさま』イベントは、佐々木監督がニューヨーク在住ということもあり非常に客層が多様で、聞こえてくる言語も意見もさまざまでした。映画にも、反捕鯨派の唱える正義と、そのターゲットになった太地町の抱える事情と、両方がバランス良く描かれています。国際環境 NGO と小さな漁村の発信力の違いなど圧倒的な差異はありますが、「ふたつの正義の物語」という副題の通り、どちらの主張にもそれぞれの「正しさ」がありました。見た後で「両者はどうやったら歩み寄れるのか」「この混乱を解決できるのは誰なのか」という問いが心に残る作品でした。

ジュゴン、クジラ、イルカ、マグロ、ウナギなど、どの生存にも人が影響を与え、政治や経済や思想が入り込み、科学データだけでは割り切れない複雑さが生まれています。海の生き物を守るためには、分野横断的に多様な人を集め、垣根を超えて「正しさ」をすり合わせて、未来のために良い選択をしていくしかないのでしょう。今後は、そんな「場づくり」が課題だと感じました。（ちよ）

辺野古・大浦湾を埋め立てて米軍の新しい大規模な基地を造ろうとする日本政府に対して、翁長沖縄県知事が基地建設に反対している。このたび沖縄防衛局が行っている工事の差し止めを求めて国を提訴した。前知事が出した埋立許可の諸条件を国が守っていないことがその理由である。昨年の別の裁判では、那覇地裁は「辺野古が唯一の選択肢」という何の根拠もない国の主張を根拠もなく認めた恥ずべき判決を書いた。今回の判決も民草に寄り添ったものを期待することはできない。司法が法の番人ではなく国の番犬になったと言われて久しい。でも中には司法の独立に基づく立派な判決をする裁判官も少しはいる。しかし、国の意向を忖度する最高裁事務局は、前回の裁判を控えて国の意向を尊重するだろうと思われる裁判官を急遽送り込んだ。司法の独立をないがしろにする日本の悲しい現実だった。

それに真逆の事態がアメリカで起こった。アメリカの国家歴史保存法（NHPA）に基づき絶滅危惧種のジュゴンを保護できない米軍基地建設は取りやめるべきと沖縄の住民らが、米国の裁判所に訴えていた裁判、いわゆるジュゴン裁判で、国の外交・防衛の事業なので訴えの資格がないとされた 1 審の決定を控訴裁判所が退けて、原告の資格を認め 1 審裁判をやり直せという決定が出た。日本よりも民主主義の先輩国では、まだ司法が独立してその矜持を保っている。ジュゴン裁判に注目したい。（宏）

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。年会費は個人 2,000 円、団体 20,000 円。匿名による参加も可能。会員は、各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行い、そのための助成金申請をすることができます。入会希望の方は、事務局まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひるも』第 205 号
2017 年 9 月 16 日発行
発行「海の生き物を守る会」代表　向井 宏
編集：瀬戸内 千代
〒606-8413　京都市左京区浄土寺下馬場町 69 番地
TEL&FAX:075-741-6281　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://e-amco.com/
ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）四四八店（448）　普通 4982452
記号番号「14400-49824521」　海の生き物を守る会